

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

弾圧

二月の第三水曜日だった。

水野はいつものように定期検診で宇和島へでかけ、夕刻に新聞社へもどってきた。やりかけの仕事があつて編集委員室へ顔をだし、津和田専務が水野をさがしていたことをしつた。

役員室へでむくと、津和田はソファをすすめ、さつそく相談をもちかけてきた。読者からの反響が多い移植医療の特集をさらに充実させるため、特集チームのデスクを移植先進国のアメリカへ派遣し、先進国の現状と課題、とくに病腎移植についてアメリカの医学会の権威といわれている学者に取材をさせたい。ついではその窓口としてフロリダ大学の藤原志郎助教授を紹介してもらえないか、というのである。

「あなたにいうのも釈迦に説法だが、この日本は、四十九日がすまんと人は死んだことにならん、と大まじめに主張する哲学者がいたりする国だからな。アメリカで、生命倫理についての国情といったものを記者が肌で学ぶ機会をつくってやりたいんだ」

津和田はクマのようなからだをまるめ、真剣な表情で心意気を語った。

変われば変わるものである。記者がそのような目的でアメリカへ行くのなら、これまで以上に患者の立場をよくふまえた特集ができるにちがいがなかった。

「急ぐのか」

「うむ、早い方がええ」

「だったら丸山先生がアメリカで発表するから、同行取材すればいい」

「その発表は五月だろ。社としては学会が病腎移植の統一見解を発表する前、つまり三月中に、いちど記者をアメリカへ派遣し、移植会議の会長にも取材させようと思う」

「なるほど、特別チームもいよいよ日本の学会ばなれだ」

水野はすこし皮肉ったが、津和田は聞き流し、たしかめた。

「藤原先生は、会長へのコネクションをもっているだろうなあ」

「そりゃ、もちろん」

水野は即答した。

アメリカ移植会議会長のアーサー・メイテスは現在、ミネソタ大学医学部移植外科教授の職にあり、かつて藤原のボスだった人物である。津和田はメイテス会長のほかにもユノス（全米臓器分配ネットワーク）や移植医療で全米一の評価があるジョンズ・ホプキンス大学へも記者を向かわせ、しかるべき人物から取材をさせたいたので、できれば藤原助教授にその旨、話してみしてほしい、といった。水野はついさきほどまで宇和島の診療所で内藤医師に会い、学会が市立病院へ派遣している調査委員会の報告内容ことで情報を交換し、松山へ帰ってきたばかり

だった。記者派遣の件は、内藤に話せば藤原につたわり、便宜をはかってもらえるはずである。水野は気持ちよく了解した。

役員室から廊下へでた。

エレベーターを待っていると背後に人の気配を感じた。

ふりかると津和田だった。目尻をさげ、

「奥さん、このころ、社に来なくなつたそうだが、具合、どうなん？」

と久美子のことを案じた。

水野は一瞬とまどつたが、すなおに応じた。

「一日ぼーっと、炬燵に入っている。おとなしいから助かるよ」

「そうか、元気に回復すればいいな」

「ありがとう。実は先日、要支援認定をうけてデイケアの手続きをした。三月からは施設のお世話になる」

「施設、というとグループホーム？…」

「そう、幸いピック病専門のホームが松山にもある。家内の実家に毎日負担をかけるわけにもいかんから、土日のをぞく五日間、昼間はあずけることにした」

「なるほど、専門のホームなら安心だな」

津和田はうなずいた。

「まあ、少し早いが、いずれだれもが通る道だから」

「それは、その通りだが」

「これまで家内が突然、社に来たりしたから、守衛さんにはずいぶん迷惑をかけたよ。でもな、社のみんなが親切にしてくれたからずいぶん助かった」

水野は職場に感謝している。

下から上がってきたエレベーターが停まり、ドアが開いた。

乗ろうとすると、津和田も一緒にのつてきた。

「なあ、水野、あんたのほうは、どうなんだ」

「おかげさまで、健康そのものだ」

「そうか、じつはおれのことだがね」

津和田はちよつと間をおき、声をひそめた。

エレベーターのドアが閉まり、下へ降りてゆく。

「妻の真智子の胸の調子が悪い」

津和田の妻は音大のピアノ科を出ていて、水野は結婚式にも招かれたことがある。

「真智子さん？ 胸というと肺か」

「うん、なんでも肺腺がん、というらしい」

「肺腺がん？ それは心配だ」

「女性に多い肺がんらしいが、進行はおそいらしい」

「そうか、しかし…」

水野はくちごもった。

「すまん、ちよつと聞いてほしくてな」

津和田は少し頭をさげた。

エレベーターが編集委員室のある二階で停止した。

水野がおけると、津和田はエレベーターにのこり、上へあがっていった。

それから十日ほど経った三月初旬の土曜日のことである。

久美子が海を見たいというので、水野は車をはしらせ、重信川の河口へでかけ

た。川が遠浅の浜辺とであう汀みぎわから沖のほうへ干潟ひがたがひろがり、春の海が蒼黒い海面に白い波頭をひらひら輝かせている。

車の外へさそってみたが、久美子は河口に群れる水鳥をながめて動こうとしない。水野はハンドルのむこうにみえる海をぼんやりみつめながら、失語症の症状がではじめた久美子が、景色に刺激されて何か話しだすのを待っていた。とおくの四国山地から海岸まで川沿いにふきおろしてくる風が、ときおり車をかすかにゆらし、中空へ舞い上がった水鳥の群をかき乱している。

「この病気は進行が早いので、環境をととのえてあげることが、症状を発現させないためには非常に大切です」

と県病院の医師からいわれていた。

それでというわけでもないのだが、同じ病の者だけが八人入所しているグループホームを紹介してもらった。見学にゆくと所長はこんなふうの水野にいった。同じ認知症でもピック病の患者は自分勝手な言動が多くなるのだが、不思議なこと共同生活をはじめるとお互いあまり干渉しなくなる。それで相手のモノをとったり、ねたんんだり怒ったりすることはなくなり、入所者同士のいさかいはきわめて少ない。ホーム内の雰囲気はおだやかで、いつも微笑をうかべた患者が多い。

水野は施設が新しく、個室に清潔なトイレがついていることが気に入った。症状がすすみ、身内での介護がむつかしくなってきたら、デイケアからステイ（入所）へきりかえなければならぬが、ここだと当分の間、安心してまかせることができそうだった。修復腎移植の再開に一定の目途がついたら、求める会の活動から身を引き、新聞社にも嘱託などでのこることはせず、久美子を自宅にひきとる。そして妻よりもかならず長生きをして、最期を看取ってやりたい。デイケアに久美子を預けるようになってから、水野はすぐ近い将来のことを、そんなふうに向うようになっていた。

日が海の上へかたむきはじめていた。

自分の中へこもり、地蔵のように沈黙していた久美子が顔をあげ、突然、「こ

の街で」の歌をたどどしく口ずさみはじめた。

この街で 生まれ この街で 育ち
この街で 出会いました あなたと この街で
この街で 恋し この街で 結ばれ
この街で お母さんに なりました この街で

きれぎれに歌い、久美子はあどけない顔で、

「ねえ正ちゃん、覚えてるう？」

と、ふたりが歌と出会ったときのことをたずねた。

ちやうど二年前の三月、日本ペンクラブが主催した「平和の日・松山の集い」のなかで即興として披露された歌である。もともとこの歌は、松山市が市民から募集した標語を目にして、詩想をいただいた新井満が「この街で」というタイトルを詩をつくり、曲をつけたものだった。詩もメロディーもやさしく歌いやすい。披露するとすぐに会場からアンコールの声があがった。たまたま夫婦でこの集いに参加していたふたりも、みんなと声をそろえて合唱した。「この街で」がトワエモナの歌声でCDとなって発売されたのは、それから八カ月後の十一月のこと、久美子はまさきに手に入れると、毎日のように口ずさんでいた。

「あたしね、この歌ね、とても好き」

津和田の妻のことが頭にうかんだ。

みんな、それぞれに痛みをわかちあいながら生きている。

水野は子供のように純心な妻の手をひきよせた。

久美子は水野の肩に頬をつけ、また歌いだしていた。

あなたの すぐそばに いつもわたし
わたしの すぐそばに いつもあなた
この街で いつか おばあちゃんに なりたい
おじいちゃんに なったあなたと 歩いて ゆきたい

赤坂の「江戸銀」で、業界紙の社主をのぞきたいいつもの四人が顔を合わせ、病腎移植問題に対処するため、最終的な打ち合わせを行ったのはこの頃である。

三月末日に公表する四学会共同声明（移植学会、泌尿器科学会、臨床腎移植学会、透析医学会）の文案はすでにできていた。結論は当然のことながら病腎移植の全面的な否定である。公表に先立ち、前日の三十日には、原高教授が厚労省で記者会見をおこない、市立宇和島病院の二十五例の病腎移植について、生着率と生存率の成績を発表し、病腎移植は生体や死体腎の移植にくらべていちじるしく成

績が悪く、とくに五年以後の生存率が格段に低い、と結論づけることになっていった。ただしこの発表には、成績のよい宇和島徳洲会病院と呉共済病院の十七例はふくんでいない。高見澤のように四十二例すべてを調査分析すれば、病腎は死体腎と変わらない成績になる。高見澤が理解を求めるとの決起集会で発表した四十二件の詳細は、厚労省健康局臓器移植対策室へも提出されていたので、厚労省側は四十二例の成績を承知していたが、公的にはまったく関知しない立場である。認めていない民間の一学者がどんなことをいおうと、いちいち耳をかたむける必要はなかった。臓器移植については、学会の見解こそが行政の指針である。この夜、四学会声明に先立ち、市立病院の二十五例だけにしぼって原高が発表することを学会と厚労省は相互に確認した。原高には中田理事長から学会の意図が伝えられ、すでに了解をとりつけている。

ここまでは目論見通りである。

「ところで…」

元幹部は肩で息をし、とんりの中田へおちつかない視線をおくった。

中田は箸を膳におくと、腕をくみ、天井を見上げて、

「五月でしたな」

とつぶやいた。丸山の演題発表のことである。

「松岡さん、丸山医師がアメリカの学会で発表ということになれば、パブリックコメントにも影響はでるでしょうな」

と元幹部は松岡へ献杯しながらたしかめた。

松岡は酒をのみほすと、空になった杯を元幹部にかえしながら、

「いやいや、パブリックコメントは形式的な手続きですから、その結果に左右されることはまずありません。それよりも問題はマスコミでしょう」

とメディアの反応のほうを心配した。

「やはりマスコミですか」

「アメリカで発表すれば、丸山先生はお墨付きをもらうことになります。すると当然、病腎を否定した日本の学会はおかしいのではないかとマスコミはさわぐでしょう。それに移植を待つ患者にしても、丸山先生の発表に大変な期待をよせているようですから、学会への批判が高まるのは必至です。そのへんの情勢について、田原くん、ちよつと報告してくれないか」

と松岡は田原に命じた。求める会の決起集会の様子をさぐるため、田原は前日から宇和島へ出張し、ひそかに情報をあつめていた。

田原はかしこまり、決起集会のさわりを伝えた。

「丸山先生の演題がアメリカの移植会議で採択された、というニュースが会場に流されると、それはもうみんな興奮状態でした。求める会は、まあいわば丸山先生の信者さんの集まりのようなものですから、病腎移植が認められたかの

ような騒ぎでした。かれらは移植を待つ患者さんのごく一部ですが、恵州会の支援をうけていますからあなどれませんが。マスコミへの影響は大きいので警戒が必要で。これは私見ですが、もしアメリカでの発表が現実になれば、病腎移植を禁じる通達をだすのは、環境的には厳しくなるおそれがあります。求める会は結束をつよめ、マスコミは厚労省の通達に反発し批判的な記事を書きますよ。そうなるとう学会も苦しい立場にたたされるおそれがあります」

中田と元幹部はたがいに顔をみあわせた。

酔いがすっかりさめ、ともににがりきった表情をうかべている。

「臓器売買事件で捕まっておれば、こんなことにはならなかった」

と元幹部はつい本音をもらし、丸山が逮捕されなかったことを愚痴った。

中田が田原へ訊いた。

「あの事件の夫婦はどうなりましたか」

「昨年のくれ、松山地裁宇和島支部で懲役一年、執行猶予三年の判決がでて、夫婦は釈放され、自宅のマンションにもどっています」

「そうでしたか。すると事件は決着ですな」

と中田は声をおとした。

すかさず、元幹部がいった。

「しかし理事長、丸山さんは病腎問題の確信犯ですよ。移植医療を混乱させています。警察はともかく、学会としてはゆるすわけにはいかんですよ」

「それは、そうです」

「このまま手をこまねいておるのも、どうかと」

と元幹部は声をひそめた。

「発表をひかえるよう、丸山医師を説得しますか」

「学会員じゃありませんから、それは無理でしょ」

「じゃ、どうしますか？」

「……」

ふたりは押し黙ってしまった。

やりとりを聞いていた田原がおずおずと提案した。

「あのう、私が申すのも僭越ですが、アメリカの学会へこちらの事情を伝える書簡を送ってみたらどうでしょうか」

「アメリカの学会へ？」

元幹部がすぐに問い返した。

「移植会議の議長あてです。丸山先生は臓器売買と無縁じゃありませんから……」

と田原は意味深長に語尾をにごした。

「なるほど、書簡か」

元幹部の頬に微笑がうかんだ。銚子をつかんだ。

「さあ、田原さん、どんどんやりましょう」

田原は両手をそろえ杯をさしだした。

この夜から、ちようど半月たった三月二十四日のことである。

津和田がファクシミリ用紙を手に、編集委員室へかけこんできた。

何事か、とみんなは立ちあがって津和田を凝視した。

津和田は興奮冷めやらぬ面持ちで、いった。

「たつたいま、アメリカから電話があつた。丸山医師の演題を移植会議は却下したそうだ。つまり、発表は急きよ、とりやめになった」

「ん？なんだ、それ」

水野は耳をうたがった。すぐには意味がのみこめなかった。

「移植会議の議長がフロリダの藤原先生へ、演題却下を知らせてきたそうだ」

「まさか、そんなことあるものか！」

「嘘じゃない、これをみろ」

津和田はファクシミリ用紙を二枚、水野へさしだした。すぐ同室の三人の委員たちもかけよってきた。用紙は一枚が英文、もう一枚がその翻訳文だった。英文のほうはレターヘッドに「全国移植学会」と団体名がはいった公用の便せんに書かれた書簡で、アメリカに派遣されている村木夏子デスクが手に入れ、そのままファックスして送ってきたものだった。その書簡の翻訳文のほうには、同じ紙面に別枠で、村木が書簡を手に入れたいきさつなどがメモ書きされていた。水野は翻訳文に目をおした。

〈2007年3月13日

アーサー・J・メイテス博士、全米移植外科学会会長殿

ミネソタ大学ヘルス・センター、移植外科教室

主題…日本移植学会理事長として丸山誠医師による全米移植外科学会2007年次総会における発表にかんする要望事項

親愛なるメイテス博士…

この書簡は日本移植学会理事長として送付されるものです。

現在問題となっている日本の病院において、臓器売買の問題が昨年の秋に浮上しました。警察による捜査がはじまり、その結果、丸山誠医師によるでたらめな腎移植の問題が明るみになりました。丸山医師はこれらの手術の内容を日本の学会ではまったく発表していません。目下、移植学会、臨床腎移植学会、泌尿器科学会、病理学会、腎臓学会、透析医学会が特別委員を派遣し、5つの調査委員会が調査中であります。現時点では最終的な結論にいたっておりません。かかる腎移植がおこなわれた病院のいくつかにおいては倫理委員会が設立されてお

りませんでした。また、インフォームドコンセントも多く場合、書面によって得られていませんでした。さらに多くの手術に明確でない点があり、ドナー腎にも摘出すべきでなかったものがあります。

調査は3月末には終了する予定なので、その時点でもう一度貴殿に調査結果を御報告いたす予定です。

丸山報告は、全米移植学会年次総会の発表演題として適切でない判定されます。

中田孝造 日本移植学会理事
長

この書簡につけられたメモ書きによると、メイタス会長はおおいに困惑し、アメリカ移植会議の幹部たちへファクシミリで書簡の原文をおくって意見をもとめた。数日後、意見を取りまとめたメイタスは「病腎移植をめぐる、日本国内には大きな混乱がある。この混乱にアメリカの学会がまきこまれるのは得策ではない」という結論にたっし、丸山論文提出の窓口になっていたフロリダ大学の藤原准教授へ「慎重に再検討した結果、この論文の発表は時期尚早である。来年度の発表にはどうか」と、メールで演題却下をつたえた。たまたまこのメールを藤原が開いていたとき、村木は取材で藤原のオフィスにいた。藤原は演題却下の事実を村木につたえるとともに、藤原の直接のボスであるフロリダ大学のリチャード・ハワード教授へこの件で問いただし、中田理事長がメイタスにおくった問題の書簡を入手した。

書簡は、「警察の捜索対象になっている丸山医師が、でたらめなやりかたで病腎移植をおこなっていた」という印象をあたえるのに十分な内容である。そして文末にあるように、発表させることをとりさげてもらいたい、という公的な要請になっていた。

「ここまでやるのかねえ」

と書簡から視線をあげた水野へ津和田が声をかけた。

「なんと陰険な！」

水野は吐きすてた。

津和田はうで組みをしていった。

「却下したアメリカも情けないが、学会がこれほどまでして丸山さんをつぶし、修復腎移植を否定する理由がわからんよ」

「丸山先生が認められると、学会のメンツは丸つぶれだからだ」

「それだけか」

「学会は自分たちと、自分たちにかかわりのある連中のことしか考えとらん。患者のことなど二の次、三の次だ」

と水野はきめつけた。

剣幕におされ、

「いまさら何をかいわんやだが、そんな学会が厚労省を動かしている」

と津和田がつぶやくようにいうと、

「まさにこのとおりだ。アメリカさんがこの国にもちこんだ自由や民主主義も、まだまだこの程度ってことだ」

水野はつきはなすようにいった。

権力の側にいる学会の思うツボである。

月末の四学会声明で、学会はまず病腎移植を厚労省が禁じる「実験的医療」と断じて、この問題そのものを決着させ、そのあとは厚労省が、「実験的医療」であるのに保険診療報酬を請求し受けとっていたことを理由に、丸山医師と病院を処罰することになる。権力の大きくゆがんだ影がひたひたと迫ってきていた。

三月三十日、移植学会幹事の原高教授は厚労省で記者会見をひらき、市立宇和島病院の病腎移植二五例について、生着率も五年以後の生存率もきわめて悪いことを明らかにした。そして翌三十一日、四学会は大阪市内のホテルで合同会議をひらいたあと、大勢の記者をあつめて記者会見をした。この会見で、学会は丸山医師がおこなった病腎移植の医療内容とその手続き上の形式や手法はすべて間違いだったとしたうえで、病腎移植を全面的に否定する共同声明を発表した。その要旨はつぎのとおりだった。

「いわゆる病腎移植という実験的な医療が、閉鎖的な環境でおこなわれたことは厳しく非難されるべきである。今回の一連の病腎移植において、医学的な問題やインフォームドコンセントと倫理委員会の欠如と不透明さがあったことは、移植医療としてはきわめて重大な問題があったといわざるをえない。もとより医学は日進月歩であるから、臓器移植の新しい治療法については、今後も研究開発されることであろうが、これを推進する上では、厚生労働省の『臨床研究に関する倫理指針』にそっておこなわなければならない。」

翌朝の各紙は、この四学会声明をおおきくとりあげた。

病腎問題が発覚した直後にくらべると、各紙の報道姿勢にはスタンスのちがいがあったが、基調としては「病腎移植全面否定」の学会声明を容認するものであった。水野は緊急に役員会をひらき、厚労省と学会へ求める会として抗議文を送ることにした。

夕刻、水野は内藤と電話で話をかわした。

「これでいよいよ全面对決ですな。丸山さんも私もお白州しろすにすわるかもしれませんが、それはかまわないが、患者さんはそっちのけです。まことに困ったもんです」

と内藤はなげいてみせたが、声は明るかった。

「先生までが処罰されることはないでしょう」

「いやいや、診療報酬の返還ということになると、市立病院は数億円になりますよ。さらに保険医が取り消されると、病院は休業においこまれますから、地域住民にとっても一大事です。院長だった私には経営上の責任があります」

「本当にそんなことになりますか」

「市立だけということなら、おおいにあります」

「とうとう？」

「市立にとってさいわいなことに、厚労省は市立だけを処罰することはできません。惠州会も同列に処罰しなければならんが、惠州会は市立とはちがいます。まちがっているのは学会ですから、決して厚労省のいいなりにはならんでしょ。惠州会は予定どおり、国際腎不全シンポジウムで反論にできます。行政もまさこんだ医学論争です。水野さん、これからがあなたや野添総長の腕のみせどころですよ」

内藤の言葉で、水野は決起集会の前に、野添総長と森弁護士に会った日のことを思いおこした。惠州会はこのとき、学会声明はとくにおりこみずみであった。

「いよいよミズリー号作戦ですね」

「そうです。主役の横綱はアメリカの学者さんですが、つゆはらいと太刀持^{たち}は求める会ですよ。ものがいえないたくさんの透析患者さんのために、大阪と東京の二つのシンポジウムを成功させないといけませんね」

と内藤はエールをおくった。

二週間余りたった十七日、大阪のシェルトン都ホテルの大ホールは一千名をこえる市民と医療関係者で早くから満席になった。ホールからあふれた人たちは、惠州会が借りたとなりの式場で大型の液晶画面をみながらの参加になった。

開会のブザーが鳴り、舞台わきの有吉へスポットライトがあたった。

よくとおる声で、有吉は自己紹介をすると、シンポジウムの開会を高らかに宣言した。向井原が氷の上をすすむような足取りで中央の演台までゆくと、主催者を代表してあいさつをした。かれは緊張した面持ちでとつとつと自らの移植体験をかたり、透析では漁師ができないことを訴えた。そして四学会声明は患者の切実な願いをふみにじるもので、とても容認できるものではなく、修復腎移植こそ患者を絶望の淵からすくい上げるいのち再生の医療だ、と参加者へ理解をもとめた。つづいて准藤原準教授が「腎不全の治療、日本の現状を他国と比較して」と題する講演をおこない、生存率、医療費、患者の満足度のすべての点から透析よりも移植がまさっているデータを示し、移植がすすまない日本の腎不全患者は諸外国にくらべていちじるしく不利益な立場におかれていることを明らかに

した。

つづいて講演したりチャード・ハワード教授は、移植できる腎臓の数に限りがある地域においては、病腎移植は容認されるべきだと主張した。そして国際的なドナー拡大策についても言及したうえで、もともと移植につかわれる腎臓はそのほとんどが理想からほど遠い、いわば疾患の腎臓であると断言し、移植の可能な腎臓の限界はどのあたりなのか、われわれはできうるかぎりの努力をはらって研究していかなければならないと述べた。

三番目に講演した米国臓器移植ネットワーク会長のテイモシー・プルーストは、アメリカでは臓器を確保するため、標準的なドナーよりもさらに基準を拡大した標準逸脱ドナーをとりいれるようにしている。その結果、移植にもちいられる臓器は確実に増加してきているが、これからは、つかえるのに病院で廃棄されている臓器を減らしていくことが課題となっていることを明らかにした。

講演の最後に、所用で来日ができなくなったエマヌエラ・タイオーリ教授のビデオが舞台の画面いっぱいに映しだされた。彼女はがんの臓器の移植をうけたレシピエントのがん発症に関する共同研究の論文を発表し、この論文のなかで、がんが転移した事例はなく、がん転移のリスクはまったく問題にされていないと述べた。

休憩のあと、三人の講演者に森と高見澤がくわわってパネルディスカッションになった。

司会水野が担当した。このなかで聴衆がもつとも熱心に耳をかたむけ、力強い拍手がおこったのは、透析患者だった森が、病腎を移植して元気になるまでの苦しい体験を吐露したときである。かれはおよそつぎのように語った。

「ぼくは腎臓病とともに歩んできた。透析患者になると、生きていること自体がもうそれだけで肩身がせまく、医療従事者や社会に感謝して生きる善人を演じつづけなければならぬ。昔ならとつくに死んでいる者が、国の費用と医療者たちのほどこして生かされている。このことへのうしろめたさがなくなることはありません。修復腎移植はこうした患者たちへの大きな福音です。捨てられる腎臓の再利用ですから、ドナーもレシピエントもウインウインの関係になれません。憲法第十三条の幸福追求権からして、移植をもとめる患者の治療選択権は十分に保障されなければなりません。修復腎移植を制約また禁止する合理的な理由はどう考えてみても見あたらないのです。腎移植をうけることは、患者の基本的な人権ではないでしょうか。医療はもともと個人的なものです。病気は個人におこるもので、その個人を救うために医療があるのではありませんか。修復腎移植のばあい、社会のシステムがまだととのっていないという理由で、国家が制限するとしたら、それは国家の怠慢から個人の生きる権利をうばうことになり、決してゆるされるものではありません」

弁護士という職業柄、やや論理が先行するくらいがあるものの、修復腎移植者である森の主張は明快で説得力に富んでいた。かれの発言は会場の思いをひとつにたばねる大きな力になっていた。場内に満ちた熱い思いを感じながら、水野は高見澤にディスカッションをしめくくってもらった。高見澤はパネラーの発言を総括したあと、「いつの時代も、正義は権力の側が弱者を抑圧し、収奪するためのロジックにすぎない」と学会の声明をきびしく批判した。

翌朝、新幹線で東京へ移動し、夕刻からホテルニューオータニで同様の腎シンポジウムが開催された。参加者は九百五十名にたっした。会場には大阪のときよりもずっと多くのマスコミ関係者がつめかけていた。シンポジウムが終了すると、パネラーたちは記者会見に臨んだ。

そのあと、慰労をかねた打ち上げの宴席があった。

十分に手応えのある二日間だった。シンポジウムに参加したもとめる会の役員たちは、気持ちのよい疲れと充足感でよく食べ、よくのんだ。高見澤は研究をつづけているアレクサンダー大王の遠征と死をめぐる謎について蘊蓄をかたむけ、毎年、障害者スポーツ大会に参加している森は世界大会の様子を語った。裏方でシンポジウムの運営を助けていた惠州会のスタッフも持ち場をはなれ、場内のあちこちで談笑していた。

ドリンクコーナーで、水野は有吉に語りかけた。

「大役、ご苦労様。素晴らしかった」

「ありがとうございます。でも、マイクの前にたつと心臓がどきどきして、あたしの声、ふるえていたでしょ？」

有吉は耳にかかる髪を指ではらい、細いくびをすこしかしげた。

「いいえ、そんなこと」

水野は即座に否定し、

「裕美さんの声、マイクをとおすとつやがでて、耳にとても心地よいですよ」

とほめた。裕美さん、と呼んだのは初めてだが、自然に名前がでた。

有吉の頬にえくぼがうかぶ。

「あたし、最初はどうかなるかと、とっても心配でした。でも進行台本を野添さんが用意してくださったので、助かりました。司会といっても読むだけです。その点、パネルディスカッションの司会は大変だったでしょ。水野さんこそ、おつかれさま」

有吉は卓上の赤ワインのボトルを手にした。

水野はワイングラスをさしだしながら、

「パネラーのみなさんの発言がすばらしかった。それでついひきこまれ、内容を深めるところまではいかなかった。この点はおおいに反省です」

とデイスカッションをふりかえり、そそがれたワインをのんだ。

すこし酔いがまわり、身体があつたかくなつていた。有吉はアルコールをひかえ、ウーロン茶のはいつたビールグラスを手にかけている。

「裕美さんもすこし、のみますか」

「いえ、あたしはこれで」

有吉は右手にもったグラスをすこしゆすつた。グラスのなかでウーロン茶が無用なうずをつくつてまわつた。

つい、水野は訊ねた。

「クレアチニン、どうになりました？」

「ええ、すこし」

有吉は声を落としました。

「下がりませんか」

「ちよつと上がつて、3に近づいています」

有吉は細い肩をすぼめ、すまなさそうな表情をした。女性の場合、2をこえろと要注意で、二度移植をしている有吉は、3以上になるといずれ透析にもどるか、三度目の移植するか、選択をせまれることになる。

「そうですか、なにも気がつかずにすみません」

水野は自分の都合で、忙しい事務局を引きうけてもらっていることをわびた。

「そんな、ご心配なさらなくても、大丈夫ですよ。求める会のお仕事をさせていただいで、すこしでも皆さんのお役に立てたなら、こんなに嬉しいことはありません」

「でも、無理はいけません。裕美さんのお手伝いができる方、探してみます」と水野は気づかった。すると有吉は瞳をあげ、

「あたし、求める会と出会つてよかつた、と思つているのです。会のみなさんとこのような活動ができることが、いま、あたしの生きがいなのです」と訴えるのだった。

水野はじんと胸が熱くなつた。決起集会の準備をしていたころから、ふつふつとわき上がる思いがあつた。その思いを有吉にぶつけた。

「僕も同感です。腎不全で苦しんでいたころ、自分が生きる意味も価値も見いだせず、とつてもつらいときがあつた。しかしいまは違います。求める会は僕も生きがいです。裕美さん、どうかこれからも一緒に、よろしく」

握手をもとめると、有吉もつよくにぎりかえしてきた。

それから、ふたりは七月に予定されている「えひめ移植者の会」のことを話題にした。お互い、求める会が忙しくなり、昨年、ふたりで約束しあつたアイリッシュハーブとフルートのアンサンブルや、二年つづいた音楽教室の子どもたちの賛助出演はできそうになかつた。そのかわり、有吉はもっと大きなことをやる

うとしていた。まだ先のことになるが、レオ・バスカーリアの「葉っぱのフレディ」の物語をオペレッタにして、音楽教室の子どもたちと求める会の総会で上演してみた、というのである。そしてゆくゆくは移植医療のシンポジウムや研究大会でも招かれ、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のように、いのちのつながりについて、子どもも大人もみんなが思いをはせる時をもちたい、と夢を語るのだった。

「やりましょう、ぜひ」

「応援してくださいますか」

「もちろんです。オペレッタのなかに、僕もフルートで出演したいな」

「そのときこそ、アンサンブルで」

有吉は羞^はじらうようにいうと、微笑んだ。